

# 教育実習生の子どものとのかかわり

白石 敏行

A Study on Student Teachers' Support for Preschool Children

SHIRAISHI Toshiyuki

(Received July 20, 2007)

キーワード：教育実習生、子ども理解、支援

## はじめに

教育実習はある決まった期間に子どもにかかわるために、教育実習生にとって子どもを理解することが難しい。しかし、この限られた期間のなかで子どもを理解するには、これまでにどのような知識や経験を蓄積してきたか、またそれにもとづきどのような子ども観を形成しているかということに影響される。そして、子どもとのかかわりによって子ども理解は、再構築されていく。したがって、教育実習生が子どもとどのようにかかわるかが子ども理解において重要となる。

子どもにとって、教育実習生は担任の保育者と同様に「先生」という存在である。子どものなかには、教育実習生に積極的にかかわってくる子どももいれば、かかわりたくてもなかなかかかわれない子どももいる。教育実習生の側も、かかわりやすい子どももいれば、かかわりが難しい子どももいる。そのため、特定の子どものとのかかわりしか持てず、個々の子どもを理解することが難しい場合も生じる。このような偏ったかかわりしか持てなければ、子どもが頼ってきたときに、どうしてよいかわからず適切な対応を行うことはできない。その結果、せっかく築きあげてきた子どもとの信頼関係を崩壊させてしまうことにもなる。

子どもの行為は子どもが自分の世界を表現しているものである。そこには、子どもなりの理論やこだわりがある。保育者はそれを理解しなければ、真の子ども理解とはいえない。なぜなら、保育者の保育行為は子ども理解に基づくものであるからである。

保育者は保育記録をとったり、話し合ったり、あるいは他者の保育を観たりすることによって、子ども理解を深めている。さらに、それらの活動をとおして、保育者は省察を行い、次の保育実践に活かしている。また、話し合いをとおして、保育者としてお互いがどのような子ども理解しているかを知ることはきわめて大切なことである。

山口大学教育学部附属幼稚園では、教育実習期間中、教育実習生に対して保育終了後に、クラスごとや学年ごとにミーティングを行っている。そして、教育実習期間の最終週には教育実習生の企画・運営によるクラス・学年の枠を越えたミーティング（協議会）が行われている。

そこで、本研究では、教育実習生がどのように子どもの行為をとらえ、かかわっているかを協議会をとおして、自分の保育実践を振り返り、見つめ直すことによって、次の保育実践に活かそうとしているのかを明らかにする。

## 1. 研究方法

(1) 教育実習期間：平成 18 年 9 月 27 日（水）～平成 18 年 10 月 20 日（金）

(2) 教育実習園：山口大学教育学部附属幼稚園

(3) 教育実習生のプロフィール：教育実習生は、幼児教育を専攻する 3 年次生 11 名および幼稚園教諭免許状のみを取得する非教員養成課程の 4 年次生 1 名（教育実習生 MY）の 12 名である。幼児教育を専攻する者 1 名（教育実習生 YS）と 4 年次生 1 名ははじめての教育実習である。それ以外の 10 名は 6 月に附属光小学校において 2 週間の教育実習を経験している。また、12 名の教育実習生は、実習前に各自が配属されているクラスにおいて 5 月から 7 月の間に 3 回の保育参加を経験している。なお、各クラスに 2～3 名が配属されている。

(4) 協議会

●日時：平成 18 年 10 月 19 日（木）13:30～15:30

●場所：山口大学教育学部附属幼稚園遊戯室

●テーマ：子どもたちのトラブルに対する保育者の援助について

●参加者：教育実習生、園長、副園長、各クラスの担任および副担任、養護教諭、筆者

●企画・運営等：教育実習生にすべて任されている

●記録等：協議内容は筆録およびテープレコーダーに録音された

## 2. 協議会の内容

協議会では、教育実習生が子どもとのかかわりで難しかったことを事例として挙げ、それと同様の戸惑いを感じた事例を各自が意見として述べる形で進められた。また、協議のなかで生じた問いや疑問について、教育実習生自身が考える対応を話し合った。

協議会はどのようなかかわりがもっとも適切であるかという答えを導き出すためのものでなく、他の教育実習生の子どもとのかかわりをもとに自分と子どもとのかかわりを改めて見つめ直すものである。

注 1：以下の事例において「保育者」は当該教育実習生を指している。

注 2：点線で囲った箇所は協議の過程で生じた問い・疑問であり、実線で囲った箇所はその問い・疑問に対する考えである。

### 事例 1 5 歳児クラス【教育実習生 KH】

教材室で AJ と AR が遊んでいたところ、いつものように仲良しの C と AI が入ってきた。AJ が、「きょうは AR ちゃんと 2 人で遊びたいから入ってこないで」と言ったので、C は泣き出してしまった。そこで、保育者が入って、事情を聞き、「なんで 4 人じゃ遊べないの？ いつも 4 人で遊んだら楽しいでしょ」と AJ に言うと、AJ が「きょうは AR ちゃんと 2 人で遊びたいの」と言い、それを聞いた C が泣きながらその場から離れてしまったので、

AJを連れてCのあとを追って行った。保育者が「どうしたら4人で遊べるかな」とCとAJに問いかけると、AJが「きょうは都合が悪いの」と言うので、「都合を教えて」と保育者が言うと、「2人で遊びたい」というだけであった。そこで、保育者が「じゃあ明日は4人で楽しく遊べるかな」とAJに聞くと、「うん」と言ったので、Cに「きょうは先生と一緒に遊んで、あしたはまた4人で楽しく遊ぼうか」と言うと、AJもCも納得した様子で遊びに戻っていった。

#### 質問

Q：次の日の4人の様子はどうだったか？

A：いつもどおり朝から4人で遊んでいた。特に、前日のトラブルを引きずる様子はみられなかった。

Q：AJの言う都合は何か理由があったのか？

A：何度も聞こうとするが、「2人で遊びたい」と言うだけであった。もしかすると、その日はARが熱を出していたことが関係あるかもしれない。AJの口からは理由は聞けなかった。

#### 意見

##### 【教育実習生 IS：5歳児クラス】

●Y, S, Kはいつも3人で仲良く遊んでいるが、急に「きょうはKくんとは遊ばない」と言ったりする。「なんで」と聞いても、「うるさいからいやだ」と言って、けんかをしたわけでもないのに、ちょっとしたことで一緒に遊びたくないという気持ちになることがある。しかし、ちょっとしたきっかけでお互い声をかけ合って一緒に遊びだす。このようなことを引きずることも少ないし、すぐに仲直りできてもののように遊べる。このようなことはよくあると思う。

##### 【教育実習生 HY：4歳児クラス】

●女の子が3人で遊んでいるところに、1人の女の子が「よして」と言うと、「わたしじゃなく他の子に聞いて」と言って、その子がもう一度他の子どもに「よして」というと「よしてあげない」と言われた。「よしてあげない」と言われた子どもが、とても寂しそうにしていたので、「じゃあ、先生と一緒におままごとしようか」と言って、3人の女の子と同じテーブルでおままごとをはじめた。保育者とその女の子が2人で遊んでいると、「入れてあげない」と言った3人の女の子も一緒に仲良くままごとをして遊んでいた。

保育者と一緒に遊んでいる状況を3人の女の子が見て、楽しそうだなと思って自然と遊べるようになったので、保育者が遊びの場を作ることも必要かなと思う。

##### 【教育実習生 IS：5歳児クラス】

お弁当のときなど、「一緒に食べたくない」と言われて、寂しそうにしている子どもに他の子どもが「一緒にお弁当食べよう」と言ってあげることもあって、他の子どもが声をかけてあげることで、一緒に食べることができることもよくあるように感じる。他の学年やクラスはどうか？

【教育実習生 KA : 5 歳児クラス】

保育者が「ここに入りなさい」というよりは、「おいでって言ってあげて」と言って、友だちから「おいで」と言ったあげたほうが、1人で食べようとしていた子どももその中に入りやすいと思う。「ここに座りなさい」とか「一緒に食べてあげてね」と1人の子どもにはたらきかけるよりも、グループで座っていたり、食べる場所が決まっている子どもたちに「おいでって言ってあげて」と言ったほうが、いいのではないかと感じることもある。

【教育実習生 YF : 5 歳児クラス】

●「どうして4人で遊べないの」と聞くよりも、「どうして2人で遊べないの」と聞いて、その答えをCやAIに伝えたら、また別の方向で納得して遊びに戻っていくこともできないのではないかな。

【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

あまりCへの言葉かけをしていなかったように思うが、Cへどのように言葉をかけたらいいのだろうという疑問がある。

【教育実習生 FS : 5 歳児クラス】

Cに共感するような言葉かけより、CはAJが自分と遊んでくれないことに対しての傷つきがあったのではないかなと思う。Cが自分自身に対して、自分に何か悪いところがあったから、AJが遊んでくれなかったんだと思わないよう、Cが悪いわけではないという言葉かけをして安心させてあげることが必要ではないかな。保育者が「一緒に遊びたかったよね」と言うより、一緒にいた友だち（AR）が「一緒に遊ぼう」と言えるようにもっていくほうが、Cも安心するだろうし、うれしいのではないかなと思った。

【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

●この事例のとき、そばに仲良しのAIがいて、何も言うわけでもなく、成り行きを見ていたが、AJ、C、保育者で話しているときに、ぼそっと「わたしはどっちでもいい」と言った。このとき、この言葉をくみ取って、Cに伝えてあげることができたらよかったと思う。

【教育実習生 MH : 3 歳児クラス】

●SK、N、Mはいつものようにとてもなかよく遊んでいるが、その日はNとMが2人で遊んでいた。SKが保育者に「きょうはMちゃんと2人で遊びたい。3人で遊びたくないわけではないけれども、きょうは2人がいい」というので、「言いに行ってみる?」と聞くが、首をふっていた。何度か聞いているうちに、SKが「粘土をする」と言って、粘土をしはじめた。この場合、NとMが「入れてあげない」と言ったわけではなく、SKはMと一緒に遊びたかったが、先にNと遊んでいたのも、一緒に遊びたいという思いが伝えられなかった。保育者が遊びのきっかけを与えたり、言葉かけをすることで、また違った方向に向けられたかもしれない。

【教育実習生 KH : 4 歳児クラス】

●Tが他の子どもと遊びたかったけれども、「入れてもらえなかった」と言って、保育者

のところへきた。保育者はRと遊んでいたが、それを聞いたRがTに「じゃ、一緒に遊ぼう」と言って声をかけた。しばらくして、保育者が「一緒に土粘土しよう」と言うと、RとTは「うん」と言って、うれしそうに手をつないで土粘土のほうへ行った。悲しいことがあっても友だちから誘ってもらえたら、立ち直ることができることもある。

【教育実習生 HY：4歳児クラス】

●「入れて」という言葉にこだわる子どもがでてきて、「入れて」と言って遊びに加わる姿も見られるようになった。AIが積木で遊んでいるTTに「よして」と言ったが、「よしてくれなかった」と保育者に言う。「入れて言ってみようか」とAIに言ったり、TTに「AIちゃんが入れてって言っているけれども、なんで入れてあげないと思ったの」と言う言葉かけをしたが、うまくいかなかった。

「入れて」と言っても「入れない」と言った子どもから、自然と「いいよ、よしてあげる」という言葉がでてくるような援助やAIが入れてほしいことを保育者を介して言うのではなく、TTに入れてほしい気持ちをもっと伝えられるように援助をしていけば、TTも入れてあげようと思えたのではないだろうか。また、まわりの子どもが入れてあげようと思えるような援助ができればいいなあと思う。

【教育実習生 KH：5歳児クラス】

「いいよ」「入れてあげあるよ」という会話を引き出すような援助？

【教育実習生 MH：3歳児クラス】

先生がいるから、よしてあげるのではなく、子どもたち同士でのやりとりになるような援助が必要ではないか

【教育実習生 KH：5歳児クラス】

「入れて」「入れない」というやりとりでのトラブルについて、保育者が深く入りすぎているのではないかと思うことがある。

【教育実習生 MY：5歳児クラス】

S、K、Yのトラブルは日常茶飯事で、よく2対1になっている。今日も、Sがテラスで泣いていて、そばにはYとSとTHがいた。泣いている声で保育者が気づいて、Sに「どうしたの？」と聞いたら、うつむいて小さな声で「今日は、Kと2人で遊びたいのに、Yくんが邪魔する」と言うので、「もう一回（Kと遊びたいことを）言おうか」とSに言ってみる。自分の気持ちをもう一度伝えてみてもううまくいかないことも多いが、邪魔をしていた子どもから、「だって～だもん」と理由を聞けるかもしれないし、もう一度言うことで、YもSがどうしたかったかがわかるかもしれない。また、横で見ていたKもSが自分と遊びたかったことに気づく可能性もある。泣いている子どもは、うまく自分の気持ちを伝えられなくて泣いているところもあるので、もう一回、本人の気持ちを本人に言わせることで、新たなことが見えてくることもある。保育者が伝えるのではなく、本人の言葉でもう一回言わせることで、また新しい情報が得られるのではないかと思う。

### 【教育実習生 IS : 5 歳児クラス】

MI が縄跳びを一緒にしたいのに、KH が「だめって言った」と言って泣いていた。保育者が KH ちゃんに「もう一回話を聞いてみようか」と言って、一緒に KH のところまで行き、KH に話を聞くと、「だめって言っていない」と言い張り、MI は「だめって言われた」と両者が大声で言い合う形になってしまった。保育者が間に入り「もう一回説明してみようか」と MI に言うと、MI が「KH にだめって言われて悲しかった」と自分から説明すると、KH も気づいた様子だったので、KH に「MI ちゃんもがんばって今思っていることを伝えたから、KH ちゃんも MI ちゃんに今思っていることを言ってみよう」と言うと、KH が「ごめんね」と言って、また一緒に遊びだした。泣いてしまうと、気が動転することもあるので、保育者が間に入ることでうまくいくこともあるのではない。

### 事例 2 3 歳児クラス【教育実習生 MH】

朝早い時期に、MY が泣いていた。保育者が「どうしたの？ なんで泣いているの？」と聞くが、MY は泣くことに一生懸命で、泣いている理由はわからなかった。近くにいた HK が、「H くんがぎゅっとしたので痛かったんよ」と MY の顔をなでながら、保育者に話したので、H を探した。MY が泣いているところに H を連れてきて、H に「MY くんは H くんがぎゅっとしたのにびっくりしたんよ。びっくりしちゃったからごめんねっていわなきゃ」と言うと、H は「ごめんね」と言った。MY は泣き続けており、「いいよ」という言葉は出てこなかった。保育者が「H くん、ごめんねって言えたからね」と伝えた。H は遊びに戻って行った。MY はまだ泣いていたので、しばらく保育者がそばにいた。

#### 補足

● MY はうしろから急にぎゅっとされたことに驚いて泣いていた。HK が「痛かったんよ」と言ったのは、MY から聞いたわけではなく、見ていて、MY の気持ちを考えてこのように言ったと思われる。「ごめんね」と言う前に H と保育者が話しているときに、H は MY と一緒に遊びたかった様子で、遊びたいという気持ちをうまく言葉にできず、結果として行動にあらわれてしまったのではないだろうか。

#### 質問

Q：ぎゅっとしたのは、遊びたかったからみたいだというのは、MY には伝えたのか？

A：そのときは伝えず、「ごめんね」を一区切りにしていいことにしようと思った。遊びたかったというのを MY に伝えられなかったのは、振り返ってみての反省。MY が動揺していたので、きちんと伝えられればよかった。

Q：MY は「ごめんね」という言葉に納得することができたのか？

A：「ごめんねって言えたからね」という言葉に小さくうなずいた。MY は予想外のことに驚くと、しばらく落ち着かない。

## 意見

### 【教育実習生 HY : 4 歳児クラス】

●お弁当のとき、SH が保育者のところにきて「HM くんが柿を入れてきた」と言ったので、HM に「どうしたの？」と聞くと、HM は「柿が嫌いだから」と言った。保育者は柿がたくさん入っていきそうな箱に気づき、見せてもらおうと、中には柿が入っていて、真ん中にゼリーが入っていた。HM に「このゼリーは HM くんが持ってきたの？」と聞くと、「SH くんにももらった」と言う。しかし、SH に聞いてみると、「あげてない。HM くんが取った」と言った。保育者はその場の事実だけを見て、HM が SH のゼリーを勝手に取ったと判断して、「勝手に取ったらダメよ」と HM に言った。その後、HM にかかわっていると、HM はゼリーと柿を交換したいという思いがあったようだった。このことから、行動だけですべてをとらえてはいけないと感じた。

### 【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

●泣いている子どもよりも、手が出てしまう子どものほうを先に考えて責めてしまいがちになる。あとから聞くと、お互いの理由に気づくことがある。

### 【教育実習生 KA : 5 歳児クラス】

●叩いたりする理由を言わずにやっている子どもが多いと思う。だから、「なんでやったの」と聞くことが大切で、それを保育者が伝えることが多いが、その理由を子どもたち同士で言えるような援助も大切ではないか。

### 【教育実習生 FS : 5 歳児クラス】

●K と Y が S を仲間はずれにして、S が泣いてしまうことが昨日もあったが、高おにをしていた TN が近くに来て「どうしたの？」と聞いたので、保育者が「仲間に入れてもらえないだって」と伝えると、TN が K と Y のところへ行き、「どうして仲間はずれにするん？入れてあげんとだめじゃん」と伝えてくれた。すると、Y と K が少し落ち着いて、S と話してみるかという雰囲気ができ、3人で話し合いをする場を持つことができた。Y と K は自分たちが悪かったことを認めて、仲直りすることができた。次の遊びに入るときには、TK が S に「高おに入りなよ」と言うことで、次の遊びにスムーズに入ることができた。

### 【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

このときに保育者はどのようなことをしたか？

### 【教育実習生 FS : 5 歳児クラス】

S が泣いていたので、落ち着けなければと思い、S のそばで「大丈夫だから」と言って、涙を拭いて落ち着かせてあげた。

### 【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

パニックになっていて、友だちや保育者の言葉が耳に入らない場合、どうしたらよいだろうか？

**【教育実習生 KK : 4 歳児クラス】**

「どうしたの？」と聞いても、うまく言えなくて、ますます気持ちが高ぶると思う。「～が悲しかったかな？」と Yes/No クエスチョンで聞くことで、子どもの気持ちを保育者が察し、受け止めて落ち着かせることも必要。

**【教育実習生 FS : 5 歳児クラス】**

泣いてしまって、うまく言えなくて、涙を流しているだけだったので、保育者が「何かひどいこと言われたの？」と聞くと首をふって、「叩かれたの？」と聞くと首をふって、「何かを取られたの？」と聞くと「そう」と言うことがあった。このような質問から話をつなげていって解決していくということがあった。

**【教育実習生 MH : 3 歳児クラス】**

Yes/No で答えるように聞いてみることで、うまく言葉を出せることもあるが、次のようなこともある。

M, MK, H が積木で家を作って遊んでいると、HM がそれを蹴って壊した。それで、M は泣いてしまった。HM に「一緒に遊びたかったの？」と聞くと、「うん」とうなずいたので、「一緒に遊びたかったから、一緒に遊ぼうって言えばいいんだよ」と伝えると、わかってくれた様子で一緒に遊び始めた。

しかし、本当にそうだったのかという疑問が残った。具体的に聞いたとき、もしかしたら、本当のことじゃなかったかもしれないのに、混乱したなかでうなずいただけかもしれない。言葉を選ぶ必要もあるし、聞くのも難しいと思った。

**【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】**

話の流れでうなずかないようにするには、どうしたらいいだろうか？

**【教育実習生 MY : 5 歳児クラス】**

まわりに子どもがいれば、まわりの子はどのような状況だったかをしっかり見ていると思うので、まわりの子どもに「どうしたの？」と聞いてみると、教えてくれると思う。本人は「こうしたい」という気持ちと「うまくいかなかった」という気持ちの中で、自分の思いとちがったことを言ってしまうたりすることがあると思うので、まわりの子どもに聞いてみると、より正確な状況を知ることができるのではないかと思う。

**【教育実習生 YS : 3 歳児クラス】**

MN が泣いていて、そばにいた HN に聞いても、どうしたのかわからず、MN に「どうして泣いているの？」と聞いてもわからなくて、落ち着くのを待っていたら、「財布が壊れた」と教えてくれたので、落ち着くのを待つのも一つの方法だと思う。

**【教育実習生 KA : 5 歳児クラス】**

子どもが泣いているときは、頭に血が上っていたり、泣くことに一生懸命なので、「こうなの？」と聞かれるのも辛いかたと感じることもあるので、落ち着くまで一緒にそばにいてあげることもよいのではないか。落ち着くと話してくれることもある。



【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

怒っている子どもを保育者が体を張って止めて「どうしたの?」「いやなことがあったの?」と聞いても、答えてくれず、また、けんかした相手を見ると怒って、また叩いたりすることがあった。怒っている子どもの気持ちを聞きたいが、つい事情を先に聞いてしまいがちになる。その子どもの思いを聞くにはどうしたらよいか?

【教育実習生 IS : 5 歳児クラス】

叩かれたので叩き返すというようなときには、止めても続いてしまっ、保育者が体を張って止めなければならぬこともある。そのようなときは、保育者も叩かれてしまうこともあるので、保育者も叩かれて痛いということは伝えるべきである。痛いということ伝えることで、やっつけたいと気づくことができるのではないだろうか。

【教育実習生 FS : 5 歳児クラス】

落ち着かず言葉が見つからないので、とりあえず、またけんかした相手を見てしまうと、手が出たり、足が出たりするので、距離を離してみることも必要。

【教育実習生 IS : 5 歳児クラス】

名前を呼んで、保育者に意識を向けさせることもよいのではないか。

【教育実習生 KH : 5 歳児クラス】

意識を向けさせるために、名前を呼んでも、知らないふりをする子どももいる。そのようなときはどうしたらよいか?

【教育実習生 MH : 3 歳児クラス】

名前を呼んでみてもだめだったり、気づいても知らないふりをしてしまう子もいるので、遠くから呼ぶよりも、近くで呼んだほうがよいのではないか。近くに行き、顔を合わせることで、意識を向けさせることができるのではないか。

事例 3 5 歳児クラス【教育実習生 YF】

JY と SG がけんかをして、JY が泣いてしまった。その後、TY たちが遊んでいたなかに、JY は強引に入っていて、「やめて」と言われた。それでもまだ、強引に入っていていこうとしたので、みんなに「やめて」と言われてしまった。JY は怒って、ポケモンごっこを一緒にやっていた AM を叩いて、さらに八つ当たりしてそばを歩いていた RS を叩いてしまった。JY と RS はいつも仲良しで JY が手を出しても、RS は怒ったりすることはなかった。しかし、その日 RS はとても怒っていて、JY に砂をかけようとしたり、JY が「ごめん」と言っても「許さない」と泣きながら言っていた。JY も RS もそれぞれ保育者に止められた。RS は砂をいじりながら、保育者と一緒に気をそらせたりして、少しは落ち着くことができたが、まだ怒っていた。JY は保育者に「いやなことがあったの?」と聞かれても話さずに、砂を投げたり、小学校のほうに行ったりしていた。その後、RS は JY をお弁当に誘おうと保育者に言われても、「いやだ」と言っていたが、昼から遊んでいる様子を見たら、

2人で手をつないで歩いている姿があった。

#### 補足

- TYたちが保育者にJYが叩いたと言って来たことで、保育者はこのトラブルを知った。
- JYは2回も拒まれたことで悲しい気持ちになって、叩いてしまった。

#### 【担任】

●ミーティングのなかで、保育者がそれぞれ見た一部分ずつを話すことで、JYが朝から帰りの気持ちがつながったという事例。この日は、2年生が来ていて、朝からSGは落ち着かず、JYを叩いてしまい、それに対してJYはいつもと違い、しくしく泣いてしまった。また、朝はホットボンドでやけどをし、それでも、遊ぼうと思って、ポケモンごっこをしていた大型ブロックのところに行ったが、言葉で「入れて」と言えず、ポケモンのキャラクターになりきってぶつかっていくから、まわりの人が「入れない」と言ったときに怒って、RSに八つ当たりをした。RSは怒って、「もう許さない、家に来て遊ばん」と言って、JYはそう言われて、自分のなかではいろいろは思いが渦巻いて、小学校に行ったりしながら、気持ちを落ち着かせて、お弁当も離れたところで食べながら、そのうちに気持ちがすっきりとなった。JYにとって、遊んでいるところにどのように入っていくかは課題だが、保育者が見ていないところで暴れるJYにどうしたらいいかだけで悩んでいたが、ミーティングのなかで、JYにはいろいろな気持ちがあって、そうなったのかに気づかされた事例。

#### 意見

##### 【教育実習生 FS : 5歳児クラス】

●すべての子どもたちのすべてを見るができないので、少しずつ見ていたことを保育後にいろいろな子どものいろいろな場面を繋ぎ合わせて、一人ひとりの課題が見つかったり、様子がわかっていくこともあるので、それぞれが見た場面を合わせていって、一人ひとりの子どもたちを見て、その子どもに合わせた解決法も見えてくるということがわかった。

##### 【教育実習生 KH : 5歳児クラス】

●長縄をとなりの組の女の子がするのを回していて、順番やルールで言い合いになる。自分の組の子どものことならなんとなくわかるが、となりの組の子どものことはまだわからなくて、どのように言ったらいいかわからなかった。トラブルを解決するには、その子どもをしっかりとわかっておくことは大切だなと思った。

##### 【教育実習生 IS : 5歳児クラス】

●子ども同士も年長だから、年中組のころからお互いを知っているし、最近は仲良しグループ以外でも大勢で遊ぶこともあるので、誘い合って楽しく遊んでいるから、お互いがわかっていけるようになって、けんかでも子ども同士で解決できるようになっていくのだろうと感じた。

### 【教育実習生 KH：5 歳児クラス】

●まわりにいる子どもはよく知っているなど感じることが多い。

どうしても保育者が解決しなければと思いがちだが、子どもと一緒にという考えをもって、トラブルを解決していくことも大切だと思う。自分のなかでパニックになってしまったり、解決方法が見つからなかったりするが、子どもに教えられて気づくこともある。子どもたちに聞くことで子どもの気持ちに沿うことができるのではないか。

### 3. 考 察

事例1では、質問として挙げられている「都合」はなんであったかは不明であるが、単にAJはARと一緒に遊びたかったからかも知れない。しかし、教育実習生KHが述べているように、体調の悪い友だちを気遣っている可能性もある。このように子どもの行為を多面的にとらえるためには、子ども理解がとても重要である。このような推測ができるのは、教育実習生KHがAJとARとの関係を十分に把握できていたからではないだろうか。

教育実習生が子ども同士で起こった問題を解決する場合や直接当該児にはたらきかけて解決する場合もある。しかし、当該児に直接はたらきかけるのではなく、うまくまわりの子どもにはたらきかけることによって問題解決できる場合もあるということも学んでいる。

また、保育者としてどこまで介入すべきかという判断が難しいということも学んでいる。介入するか否かの判断の基準は、教育実習生が子どもの現在の育ちをどう理解しているかである。そのことを踏まえ、一人ひとりの育ちの見通しをどこに置いているかによってかわりは異なる。たとえば、●●ちゃんだったらこのようなかわりが必要であるが、○ちゃんだったら時間がかかるかも知れないが本人に任せてようというかわりをするようになる。しかし、保育実践の現場ではこのような判断を瞬時に行わなければならないので、教育実習生にとってとても難しいことである。そのためには、限られた時間やかわりのなかで、一人ひとりの子どもの園生活の様子、発達が正確に把握されていなければならない。保育者が介入しすぎてしまうと、子どもの育つ芽を摘み取ってしまうことになる。

事例2のように、教育実習生にとっては泣いている子どもへのかかわりはとても難しい。子どもが泣いていると、どうして泣いているのかということばかりが気になってしまい、泣いている子どもに理由を聞こうとする。泣くことによって、子どもの気持ちは高揚しているので、理由を聞こうとしてもなかなか話してはくれない。そこで、まずは、高揚している子どもの気持ちを落ち着かせることが大切である。落ち着くことによって、子どもの気持ちに余裕が生じ、理由を話してくれるかもしれない。また、当該児ばかりにかかわってしまい、たとえまわりに子どもがいても、その子どもから情報を入手しようとする精神的な余裕は教育実習生にはあまりない。

また、泣いている場合には、泣かせた側に問題があると考えてしまいがちなため、泣かせた子どもを責めてしまうようなかわりをすることがある。しかし、泣かせた側にも泣かせた理由が必ずあるので、両方の言い分を聞く必要がある。そのうえで、子どもに適切なかわりをしていかなければならない。なぜなら、言い分を聞いてもらえず、一方的に責められてしまった子どもの保育者に対する信頼は損なわれてしまうことになるからである。

さらに、子どもにしてよいことと悪いこと、いやなことをされたとき相手がどのような気持ちになるのかを理解させる必要もあることを学んでいる。その際、保育者が相手の気持ちを代弁することもあるが、お互いにじっくり話をさせることによって、お互いの気持ちを理解させることも必要である。

保育者は子どものすべての活動にかかわることができないので、自分がかかわった部分と他の保育者がかかわった部分とつなぎ合わせて、その子どものことを理解するようにしなければならない。その点において、保育後に行われるミーティングは重要である。また、保育者が必ず問題を解決しなければならないわけではなく、子どもに任せることによって子どもの気持ちにそう形で問題解決できることもある。また、保育者は子どもとのかかわりをおして、子どもからいろいろなことを教えられる。しかし、その基盤には、保育者側に子どもから学ぶという姿勢がないとそのようなことはありえない。保育者として成長するためには、同僚の保育者から学ぶことはもちろんであるが、子どもから学ぶという姿勢を常に持ち続けてほしい。

最後に、今回の協議会をおして、各自の課題が明らかになったと考えられる。彼らが資質を兼ね備えた保育者になるために、その課題を一つずつ解決し、次の保育実践に活かせるように努めてほしい。

#### 付記

本研究は、平成18年度後期基本実習協議会における資料を分析したものである。協議会に出席された附属幼稚園の先生方ならびに教育実習生のみなさんに深く感謝いたします。併せて、教育実習生にいろいろな学びを与えてくれた附属幼稚園の子どもたちにも感謝いたします。